〈行為―生産志向的文学教育〉の実践的展開

―中等国語読本“UNTERWEGS”を手がかりに―

土山　和久
(大阪教育大学)

1．問題設定

本稿は、ドイツの文学教授学研究において目下のところその議論の中心に位置[1]している〈行為―生産志向的文学教育(Handlungs- und produktionsorientierter Literaturunterricht〉の理論と実践を明らかにする一連の研究に属すものである。

これまでの研究では、同論が提唱されてきた背景、理論的特質および実践上の方法を考察したが（土山 1995)，本稿では，〈行為―生産志向的文学教育〉が授業実践に向け具体的にどのように構想されているのか，という問題を，同論の主要な提唱者の一人である G.Waldmann が編集に加わった中等国語読本“UNTERWEGS”を手がかりにして解明してみたい。

2.中等国語読本“UNTERWEGS”と（行為―生産志向的文学教育）の関わり

中等国語読本“UNTERWEGS”[2]は，ドイツ最大手の教科書会社クレットから，1992 年以降，前期中等教育第 5 学年から第 10 学年まで（＝ゼクンダ段階Ⅰ）の巻が刊行され，ドイツの多くの連邦州で広く採択されている（巻 10 は未入手)。

2.1.構成上の特徴と系統性

まず，同読本シリーズを構成の観点から見た場合，次ページ［表１］[3]が示すように，一つのテーマに関して幾つかのテクストが選ばれる形で主題単元を形成する第一部「読み方の部」と，国語科教育の学習領域ないしはその重点に向けて編成された第二部「学習・研究の部」の二つの部分から成り立っている点が特徴的である。さらに，これら二つのパートには，全ての学年を貫く系統的な基準線がそれぞれ設定されている。

2.1.1.「読み方の部」に見られる系統性

第一部「読み方の部」では，次のような“中心テーマ”が設けられている。

- 個人，（自己）同一性，自我
- 社会，共生，我々
- 労働世界と職業生活
- 自然，環境，技術
- 遠い国，未知の世界
- 過去の時代
- 空想的で現実離れしたもの，境界（限界）を超えて行くもの[4]

［表１］："UNTERWEGS" の単元一覧（第５～９学年）

＊第５学年

【第１部】

夢／少女と少年／いたずら者，愚か者，変わり者／動物と人間／季節，一日の時間／どこか別の場所の子ども／ローマ時代の名残／想像力の海の上で

【第２部】

・読みの練習：エジプトの読書冒険旅行
・物語の理解：何が物語と関係あるのか？
・言語ゲームと詩：絵，音，響き
・メルヘン：かつてあったこと，かつて一度もなかったこと
・本の世界：「本」― そこには何が書かれているか
・絵を読む：話しかける絵
・プロジェクト：私たちの学校紹介

＊第６学年

【第１部】

見なれないもの／共に生きる／樹木／季節，一日の時間／冒険につぐ冒険／農民と騎士／夢想の中で頭を働かせる

【第２部】

・読みの練習：読みの秘訣
・物語の理解：物語スライドと緊張検査器
・詩：韻文，押韻，連
・寓話：寓話の教え
・本の世界：本をかぎつける
・コミックスを読む：絵から絵へ
・プロジェクト：自由劇場―私たちは演技する

＊第７学年

【第１部】

わたしはわたし／友情／働く父親，働く母親／自然と人間／インド―未知の世界／英雄？／不気味な出会い

【第２部】

・読みと学習の技術：コウモリの調査
・物語の理解：語り手と語り手の視点
・バラード：特殊な詩
・青年文学の理解：『豹のような影』
・劇場の世界：舞台裏をのぞく
・写真を見る：写真と理想像
・プロジェクト：様々なドイツ語

＊第８学年

【第１部】

"あなたが私を愛していること"／再会／女性の生活，労働世界／車社会／他の世界との出会い／魔女／未知の惑星

【第２部】

・読みと学習の技術：飛行に関する絵とテクスト
・ショートストーリーの理解：特殊な物語
・詩の理解："絵や写真に語らせる"
・戯曲テクストの理解：舞台の場面
・本の世界：ある女流作家の自己紹介 Renarte Welsch
・プロジェクト："美しい森よ，君は誰のものなのか"

＊第９学年

【第１部】

大人になる／裁判？／何のために働くのか？／都市の経験／アメリカへの旅立ち／鉤十字のもとの青年／何事も不可能ではない

【第２部】

・読みと学習の技術：テクストについて書かれたテクスト
・小説の理解：青年文学
・詩の理解：コトバ，行，詩
・本の世界：本の市場
・テレビの洞察：連続，連続，連続……
・プロジェクト：全ての感覚を働かせて

例えば，中心テーマ「自然，環境，技術」には，「動物と人間」（第 5 学年）—「樹木」（第 6 学年）—「自然と人間」（第 7 学年）—「車社会」（第 8 学年）—「都市の経験」（第 9 学年）が属し，様々な文学のジャンルから取り出されたテクスト群が，「学年段階を超えてテーマの多様性と代表性を守る」ように編成されている。[5]

2.1.2.「学習・研究の部」に見られる系統性

一方，「学習・研究の部」は，国語科教育—とりわけ文学教育—の課題領域を包括するものであり，そこにもこのパートの骨格を形成する次のような柱を看取することができる。

・読みの練習—読みと学習の技術
・テクストとの交わり
・本の世界と文学営為
・メディアとの交わり
・プロジェクト学習

このような柱に沿いながら，第２部「学習・研究の部」は設計され，「多様性と代表性を，そして学年段階を超えて教科学習の継続性を保障」することがねらわれている。

2.2.〈行為—生産志向的文学教育〉によって基礎づけられる文学の読みの学習

これらのうち，「テクストとの交わり (Umgang mit Texten)」という概念は，70 年代以降，それまでの「文学教育」に代わって，ドイツの【国語科学習指導要領】において採用・定着してきたものであり—その意味で，文学教育と同義なのであるが—，そこでは，文学的テクストとどのように交わるか，その交流形式が問題となり，その基礎づけに，〈行為—生産志向的文学教育〉の理論的連関性を色濃く認めることができる。すなわち，“UNTERWEGS” では，この「テクストとの交わり」は次のように解説されている。

> この学習領域は本読本全体に対するキーファンクションの役割を担っており，各学年の巻ごとに，ジャンルによって限定された重点を置く複数の授業単元が適切に呈示される（中略）。テクストと交わる中で，受容の様々な局面が活性化され，支援される。例えば “何が物語と関係あるのか？” では，国語の授業の教科書においてとりわけ疎かにされていた一次的受容の局面（より深い分析的省察を欠く自発的なテクスト理解，主観的な表象や経験の付加）と集団での意味構築の局面（他者の経験と比較・対照するために主観的な読みの経験の形成，テクストにおける共同学習の取り決め）が明白に解明される。また，学年段階を超えて，“二次的な読み方の修得”（テクストやコンテクストに対する批判的省察，作者・テクスト・読者の間の関係に対する省察，形式の慣習やジャンルの固有性に対する省察）が強調されるが，それは第 5 および第 6 学年ですでに，より単純な文学的形式（例えばメルヘン）で行われる。総じて，UNTERWEGS は生徒のために，多くは文学的テクストとの行為－生産志向的交わりを要求する者の側に立っており，“自律的な芸術作品” とその単なる認知－分析的習得を提唱する者に荷担しないと考えられる。[6]

このように，“UNTERWEGS” が構想する文学的テクストとの交流形式は，学習者の自発性・主観性を強調する，受容美学（読者行為論）的に基礎づけられた一次的な読みと，分析・省察的な読みに重点を置く二次的な読みの両方を見据えるものであり，その両者は「行為—生産的交わり」という概念の下で束ねられているのである。

さらに，“UNTERWEGS”では，国語科教育の理念および方法上の諸原理の１つとして，「生産志向的学習(produktions- orientiertes Lernen)」が挙げられている[7]が，それは，先の「行為―生産的交流形式」と関連して，次のように解説されている。

> UNTERWEGS における読み方教育は，受容的活動に生産的活動を，認知的活動に想像的活動を並置する。したがって，「学習・研究の部」の課題－テクスト配列は，テクスト当該の内容・問題・行動の仕方についての議論を狙うのみならず，個人あるいは集団で介入するテクストとの格闘の手ほどきをするのである。そのためには，とりわけテクストの主観的変形・発展形成，対立テクストの構想，独自の創造的企てに対するジャンル原理や作用手段の受け取り，構造的に手を加えられた文学的ジャンルの中で自由に書くことなどが必要となる。生産志向的読み方教育の長所は，話したり書いたりすること，つまりテクスト生産のための“共同練習”の中にのみ存するのではなく，むしろ，様々な才能を持つ生徒たちが，テクストで獲得した認識や洞察を独自の形成の企てに結びつけることができるとき，より簡単にかつ効果的にそれらを習得することができる点にある。このことは，第５・第６学年において，とりわけ詩，メルヘンと寓話，そして物語との交わり（“物語スライドと緊張検査器”）の単元の中で明らかになる。これらの単元の中で，想像力と認知能力が同等に促進され，生徒たちが呈示されたテクストを独自の表現形成の試みと比較・対照しながら省察するときに，ジャンルに関連した形式諸原理が，彼らの生産的な所有に移るのである。生徒たちを主に抽象的で認知的な操作だけに巻き込むような文学教育は，テクストとの交わりにおける経験の広がりを切りつめ，特定の生徒集団に対して学習の障害を作り上げる。行為－生産志向的な学習活動形式は，「学習・研究の部」のほとんど全ての授業単元の中に含まれていて，あらゆる年齢段階に対しても提案されているのである。[8]

それでは，このような文学の授業における「行為―生産志向的な学習活動形式」は，単元および教材の形で，どのように提案されているのであろうか？　以下では，上の引用中に見られる第６学年の単元“物語スライドと緊張検査器(Geschichtenschieber und Spannungsprüfer)”を例に，その具体像を分析してみたい。

3. 単元“物語スライドと緊張検査器”（第6学年）の分析

3. 1. 単元の構成

単元“物語スライドと緊張検査器”は，学習領域「テクストとの交わり」に属すものであり，物語テクストをその対象に取り上げ，次のような単元構成を見せている。

１）物語の続きを語る
２）語りの構想を探求する
３）物語を正しく並べる
４）緊張，緊張，緊張
５）君たちが物語を作るための提案

3. 2. 小単元および教材の特徴

ここでは，論文末に付した［資料］（抜粋）[9]を参照しながら，同単元を構成する小単元および教材の特徴を，上の単元構成に従って順に分析する。

3.2.1. 物語の続きを語る

まず，第 1 節「物語の続きを語る」(21 ページ) で取り上げられている Peter Härtling の物語「カエルから何になったか？」は，ゴムのカエルを波にさらわれた息子の父親が，22 ページ 5 行目「その時から私は，我々にまもなく見えなくなるカエルの見に起こるかもしれない物語をいくつか案出し始めた」と，複数の可能なストーリー，すなわちヴァリエーションを語る構造を持つものである。つまり，この物語自体が，開かれた語りの可能性を学習者に提示し，語るきっかけや状況設定をふまえながら，学習者が続き物語りを独自に創作・形成することを励まし，誘う構造を持っているのである。

3.2.2語りの構想を探求する

この「語りの構想を探求する」(23 ページ) では，“物語スライド” なる小道具が提示される。この “物語スライド” は，物語の構想の本質的なエレメントを見つけ出すために，あるいは，それらの観点を通して，まとまった語りの構想に到達するために用いられるものであり，縦の帯を上下に移動させることによって，学習者は多くの組み合わせの可能性が存在すること，そして，幾つかの組み合わせだけが筋道立った物語の構想を可能にすることができることを認識する。したがって，この “物語スライド” は，物語テクストを分析する観点を与えると同時に，帯の組み替えを行うことによって，独自にテクストを変形・構想する手がかりを与えるものである。この学習活動は，〈行為―生産志向的文学教育〉の 1 つの基本的過程 “変形” に基づくものと考えられる。

3.2.3. 物語を正しく並べる

「物語を正しく並べる」では，バラバラに並べられた物語の展開部分を正しく並べ替える活動を通して，1 つの物語は筋道立てて構築されていること，そして，物語はその筋道立った語りの連関を条件づける，導入部，展開部，結末部のように，機能の部分を表していることを，学習者に認識させることがねらわれている。この学習活動は，〈行為―生産志向的文学教育〉のもう 1 つの基本的過程 “修復” に基づくものであり，物語の構造や論理的展開を考察する，より認知的な活動であると考えられる。

3.2.4. 緊張，緊張，緊張

「緊張，緊張，緊張」(25 ページ) では，中国の人里離れた村の安宿で，戦没兵士の幽霊に遭遇する怪談「戦没兵士の夜」を，“物語スライド” を用いて分析した後で，物語がどのようにして読者をハラハラドキドキさせるのか，その語り手の形成手法を考察する課題が提示されている。その際，緊張感・緊迫感を生起させる，物語の展開・構造上の特質を 26 ページ末のようにヒントとして与え，さらにテクスト表現上の特質を，本単元の第 2 の小道具 “緊張検査器” (26 ページ) を用いて探る課題が提示されている。

3.2.5. 君たちが物語を作るための提案

この小単元では，学習者が実際に物語を作ることが中心課題とされ，そのために次のような様々な提案がなされている。

・物語の前後を“拡張”する
・絵から物語に対する刺激を得る
・物語の続きを書く
・前もって与えられた人物の視点から物語を語る
・物語の核を発展させる
・一枚の絵に従って物語を語る[10]

そして，このような提案を受けて作られた独自の物語テクストが，“緊張検査器”で測定されることになる。

4. 考察

以上のように，〈行為―生産志向的文学教育〉に基づく単元および教材例を分析した。それによって展開する学習活動は，我が国の国語教育実践においても，しばしば提案されているものであるが，〈行為―生産志向的文学教育〉において重要なのは，文学的な形成方法を認識し，それを学習者自身が用いることによって，形成手段の１つのまとまった総体としてのジャンル―本稿では物語―をもとに，それに特有の論理構造や表現作用に支えられた独自の読みの形成を，実験的に，生産的に試みることである。つまり，学習者の文学的認識を生産物として対象化させるその方法が生産的方法なのである。学習者がこのような方法を用いて文学的テクストと交わるとき，それは，主体的な読みへの参加を開くと同時に，“速やかな読み・理解”に対立するものとなるかも知れない。けれども，この手作業的に仕組まれる“読みの遅延化”こそが，“UNTERWEGS（回り道をして）”がねらうものなのである。

本稿で例示的に取り上げた単元“物語スライドと緊張検査器”は，総じて，分析によって得られた文学的形成手段を用いて，独自の読みを構築・発展させていく過程を描く単元であったが，逆に，独自の読みの構築から出発し，その後でオリジナル・テクストと比較・対照することによって，両者の文学的形成の差異に注目させる過程も考えられよう。例えば，同単元では，いくつかのテクスト教材が中略，あるいは後略されており，その空白部を予想する形でテクストを独自に形成する課題は，そのような過程を見せるものとなるのである。

本稿では，“UNTERWEGS”において〈行為―生産志向的文学教育〉との関わりが端的に見えてくる箇所をかいつまんで取り上げたため，同読本シリーズを基礎づけるその他の学習領域および方法上の諸原理の詳細に立ち入ることができなかった。それらと〈行為―生産志向的文学教育〉との関連についての考察は別の機会に譲りたい。

また，ドイツの国語教授学研究において，“創造的に書くこと(Kreatives Schreiben)”も近年の重要なテーマとなっている。方法の点で親和性を見せる両者の関係を考察することも，今後の重要な課題として書き留め，本稿の結びとしたい。

―注―

*1　近年，〈行為―生産志向的文学教育〉は，国語科カリキュラムの中で，その位置価値を徐々に獲得しつつある。例えば，バーデン・ヴュルテムベルク州【レアルシューレ国語科学習指導要領】では，学習領域「文学，他のテクストとメディア」において，学年を通した展開ラインを形成しているし（土山 1998a），また同州レアルシューレ国語科修了試験では 1995 年度より，「テクストとの生産的交流」が課題の１つになっている（土山 1998b）。

*2　"UNTERWEGS" : (Hrsg.) Günter Waldmann u.a., Klett 1992, Stuttgart.

*3　同上（第 5 ～ 9 学年）の目次をもとに土山が作成。

*4　"UNTERWEGS-Lehrerheft" :「第 5 学年教師用指導書」, 7 ページ。

*5　テクストの選択基準として次のことが挙げられている。

－人格や同一性が発達する際に，成長する者が抱える個人的問題と格闘する励ましを差し出すテクスト；

－我々の社会と世界の未来に関連する問題設定を投げかけるテクスト；

－自分自身の生活現実との空間的・時間的・反射的な距離を設定するテクスト；

－可能な限り広がりのある土台の上で，テクストの種類やメディア，表出形式，コミュニケーション意図，効果的な手段の多様性を明らかにするテクスト；

－文学的テクストの批判的・ユートピア的・創造的ポテンシャルを開拓し，美的要求の高いテクストに対する積極的な態度を開くテクスト（同「注 4」, 8 ページ)。

なお，「読み方の部」の詳細については土山（1997）を参照のこと。

*6　同「注 4」, 9 ページ。

*7　その他には，「プロジェクト志向的学習活動」,「発見的学習活動」,「視覚に支えられた学習活動」,「目標―科学志向的学習活動」が挙げられている。

*8　同「注 4」, 11 ページ。

*9　同「注 2」: 第 6 学年の巻，150 ～ 159 ページ。

*10　同上，158 ～ 159 ページ。

―引用および参考文献―

・"UNTERWEGS" : (Hrsg.) Günter Waldmann u.a., Klett 1992, Stuttgart.

・G.Haas u.a. (1994): 'Handlungs- und produktionsorientierter Literaturunterricht', in: "PRAXIS DEUTSCH" Heft-123, 1994.

・土山 (1995) :「〈行為―生産志向的文学教育〉の理論と実践的方法」, 全国大学国語教育学会編『国語科教育』第 42 集所収。

・土山 (1997) :「ドイツにおける国語科教育の課題領域の広がり―教科固有の課題領域からの『逸脱―』」, 兵庫教育大学附属小学校凱風会編『凱風』第 9 集所収。

・土山 (1998a) :「ドイツ連邦共和国バーデン・ヴュルテムベルク州【国語科学習指導要領】(3) ―レアルシューレ編」, 前田貞昭編『兵庫教育大学近代文学雑志』第 9 号所収。

・土山 (1998b) :「レアルシューレの国語学力―カリキュラムおよび修了試験の分析から―」, 「国語教育攷の会」編『国語教育攷』第 13 号所収。

―付記―

本稿は，第 90 回全国大学国語教育学会（東京大会 96.7.31）において行った，自由研究発表「ドイツ中等国語読本 "UNTERWEGS" の考察―〈行為―生産志向的文学教育〉との関わりを中心に―」をもとにまとめたものである。

[資料] 単元“物語スライドと緊張検査器”の教材および学習課題（抜粋）

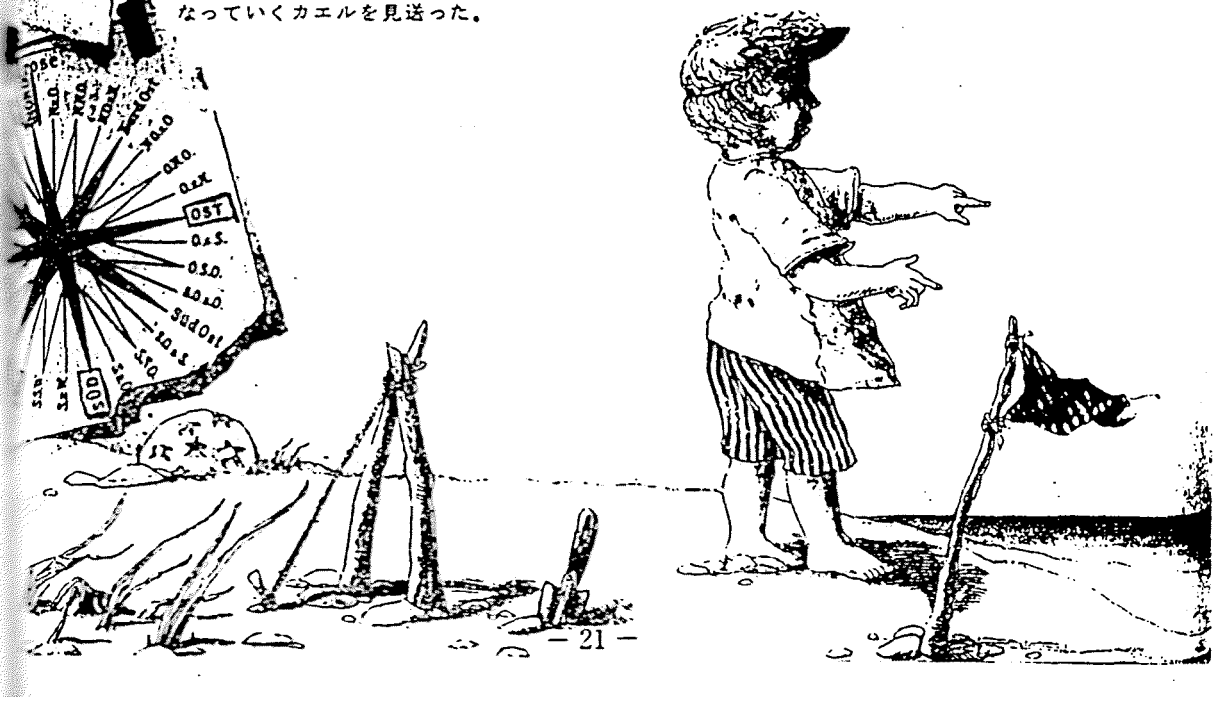
物語スライドと緊張測定器

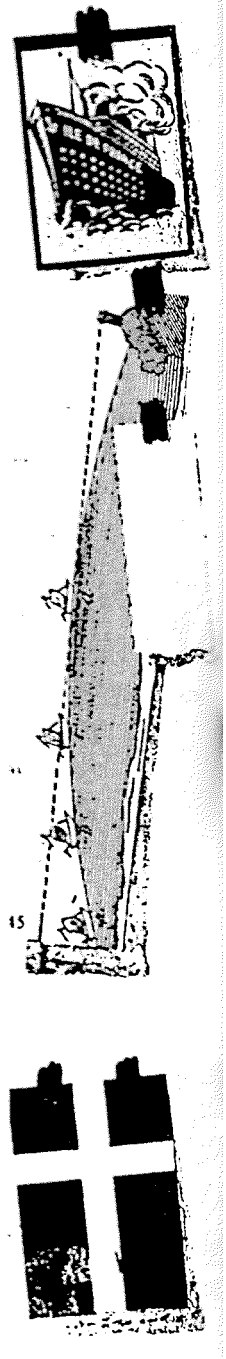
1　物語の続きを語る

カエルから何になったか？

今から二年前，私は私の子どもたちと一緒にオランダの海に来ていた。天気は良く，私たちはしばしば泳ぎに行ったものだった。当時３歳だった私の息子クレメンスは，海に行くというので，空気を入れて膨らませる大きな黄緑色のゴムのカエルをプレゼントされていた。それは彼の大変なお気に入りで，いつも自分の後ろに引きずっていた。水に入ると，彼はそのカエルに座り，それといっしょに波に揺られていた。

君たちみんなが潮の満ち引きを知っているかどうか，私にはわからないが，全ての海には潮の満ち引きがある。満ち潮の時には，水は陸地の方へ接近し，引き潮の時には，陸地から離れていく。潮が引いている時に泳ぐあらゆる人が，途方もなく速く海の方へ引っ張られるほどの力と速さを伴って，水は陸地から離れていくのである。それだから，干潮の時には泳ぐべきではない。クレメンスもそのことは承知していて，そんなまねは決してしなかった。けれども彼はこう考えた。このカエルなら泳ぐことができるだろうと。そこで彼はカエルを水の上に置き，それが少し泳ぐのを待っていた。急に，私は彼が泣き叫ぶのを耳にする。：カエルが逃げた！　カエルが逃げた！　そして私は，そのカエルがすでにどれほど遠く離れて海上に漂っているかを見る。私はカエルを捕まえるために海の中へ走って入っていったが，潮流がどれほど私の足を引っぱっているか，砂が引き潮によってどれほど海の中へ巻き込まれているかに気づき，そこに立ちつくし，どんどん小さく小さくなっていくカエルを見送った。





クレメンスは激しく泣きわめいていた。

彼は私に訊ねた。：あのカエルは泳いでどこへ行っちゃったの？　この海の向こう側はイギリスなので，私は彼に次のように言った。：あのカエルは，おそらく明日にはイギリスにいるよ。

その時から私は，我々にはまもなく見えなくなるカエルの身に起こるかもしれない物語をいくつか案出し始めた。

おそらくこんな物語だろう。：そのカエルは泳ぎに泳ぐ。カエルは海の上ではちっぽけだ。一隻の巨大な汽船がそのそばを通りかかり，一人の少年がその汽船から下を見下ろし，そのちっぽけなカエルを見つけ，そして叫ぶ。：あそこにカエルがいる！　僕はあのカエルが欲しい！　それを聞きつけた船長は，「私たちはあなたのためにこの汽船を止めることはできませんよ。それに私たちが汽船を止めるとしても，船が止まるまでにはとても時間がかかるので，我々はあのカエルを見失いますよ」と言う。そんなわけで，その少年はカエルに手を振り，カエルはさらに泳ぎ続けるーおそらくイギリスの方へ向かって。

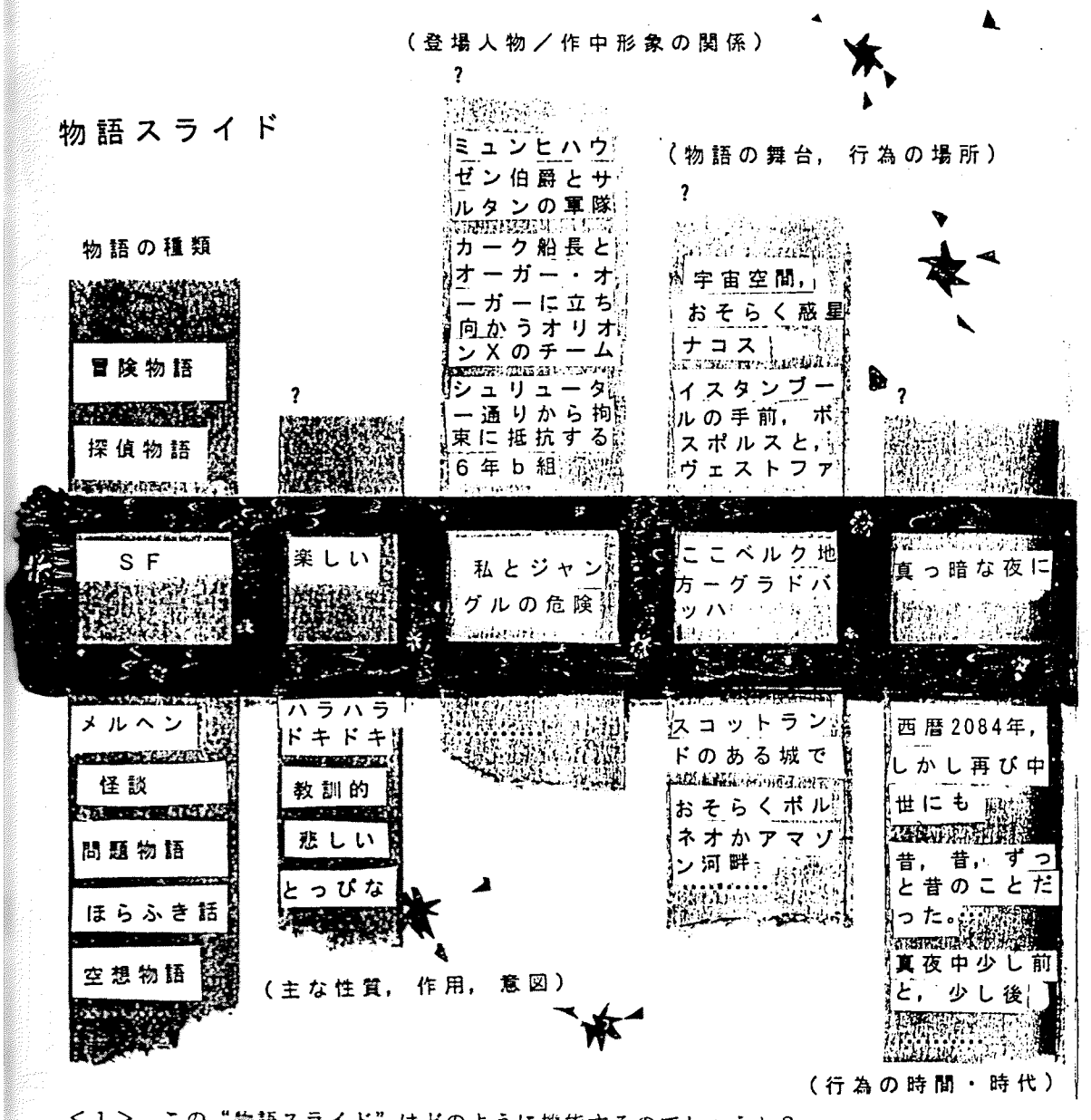
（・・・・・・）

さらに私は，まったくハラハラドキドキさせるカエルの物語を案出する。：そのカエルは，イギリスの海岸に近づくまで，長いこと海の上を漂流する。波はどんどん高くなっていく。空は悪天候になる。稲妻が光り，そよ風はものすごい嵐に変わる。その嵐は，重量級の船でさえ急いで港に駆け込み，それが過ぎ去るまで待機するほど激しいものである。けれどもそのカエルは，波がどんなに高くなろうとも，それを気にとめないほど軽快である。カエルは波から波へピョンピョン飛び跳ねたり，時折，水が自分の頭を超えて打ち合うような波の谷間に落ちたりしている。そのようなゴムのカエルを知っている人なら，今や，栓が押し出され，中の空気が漏れることだけを心配するに過ぎない。もしそうなると，そのカエルは沈んでいくであろう。けれども私の物語の中のカエルは沈んだりはしない。海岸沿いにあるイギリスの村に住み，漁師である父親のボートでしばしば海の上を漕いでいた一人の少年が，嵐の少し前に，父親に尋ねないで，ボートを持ち出していた。そういうことを彼は以前にもしたことがあったのだ。けれども今回は，その少年は天気がどうなるかということに注意を払っていなかった。それは彼のミスであった。彼は海に向かってどんどん漕ぎ出していたが，突然，家ほどの大きさのある波が彼の上に襲いかかり，ボートを取り囲むように揺さぶり，高々と投げ上げた。その少年ーエドワードとだけ呼んでおこうかーは，手から一方のオールを失い，まったく無力に海の上を漂うばかりである。どんどん水がボートの中に押し寄せてくるので，エドワードはそれを手で汲み出すことを試みる。それはまったく功を奏さない。石ころのように沈んでいくほど，ボートが水でいっぱいになるまでに，そうは時間はかからなかった。その少年は恐ろしい不安を覚え，泣き叫び，助けを求めて大声を上げるが，彼の声を聞く者はだれもいない。波は彼をあちこちに引っぱり，彼は大量の水を飲む。彼は泳ぐことを試みる。もともと彼は泳ぎが上手であるが，このように荒れ狂っている海の中では，少しも泳げたものではない。そのとき，彼はカエルを見つける。カエルは波によって彼の方へ流れ寄ってくる。カエルは空気ではち切れんばかりに膨らんでいる。少年はカエルにしがみつき，それにまたがって，上になり下になりしながら波乗りし，そうして彼は陸地にたどり着く。今や，私のカエルは一人の少年を救ったのだった。（・・・・・・）

ペーター・ヘルトリング (Peter Härtling)

【１】　今，みなさんは，一つのカエル物語に対して何を語りますか？

2　語りの構想を探求する



＜1＞　この“物語スライド”はどのように機能するのでしょうか？

＜2＞　“物語スライド”のそれぞれの窓にはどんなものが位置していますか？　そして，それらの窓にどのような見出しをつけることができるでしょうか？

＜3＞　一つの物語に対して構想がぴったり合うまで，スライドを動かしてみましょう。そしてその構想を語ってみましょう。

＜4＞　幾つかの物語に対する構想を自分で集めてみましょう。

?

砲丸に乗って，壁や海を越えて飛んでいく

タイムトンネルを通って逃れ，時間のキリの中で迷う

最初は殴り合い，次にサッカー。それが二人の少女の

（行為の本質，主題，モチーフ，プロット）

国境での予期せぬできごと

できごとの日付：1968年12月2日
できごとの場所：ブランケルのドイツーオーストリア国境派出所

12月という月の夜には，往来がほとんどなかった。ここ4時間のうちに，3台の車両が通過したが，そんなことは未だかつてなかったことだった。けれども，税関と国境警察の職員は，それを悲しんだりはしなかった。数時間来，凍てつくような風が谷を通って吹きまくり，不快な霧雨を運んできた。霧雨，それは刻々と小さな雪の結晶へと変わっていった。けれども，その平和な安らぎと静寂は，まもなく終わりを迎えることとなった。
23時10分，国境警察巡査ジーゲレのデスクの上の電話が鳴った。電話の受話口から彼に聞こえてきたものは，彼を椅子から飛び上がらせた。彼の方から質問をする前に，電話をかけてきた見知らぬ人物は，すでに電話を切っていた。
すぐさまジーゲレは，自分の周りにいる税関と国境警察の同僚を呼び集め，次のように説明した。：
「私は，たった今，匿名の電話を受けた。その人物によると，間もなくある車が入国してくるそうだ。それはフランスの国籍略号がついたフィアットで，その車両の中に10キロの麻薬が隠されているらしい。これは忙しくなるぞ！」
まず，非常事態段階Ⅰが発令された。国境遮断棒が降ろされ，総員は準備を整えた。
ゆっくりと数分が経過した。　彼らは皆，金縛りにあったように，数多くのカーブを描いて道路が蛇行する，オーストリア側の谷の部分を凝視していた。その時，彼らは一対の光を発見した。そして……そのすぐ後にもう一台……間違いない，国境に二台の車が接近していた。数秒間，それらは，オーストリアの国境遮断棒を覗けないところで見えなくなったが，そのうち一台目の車が姿を現した……。巡査ジーゲレは興奮した声を発した……それは黒色のフィアットだった。……その車が明かりのある場所に来たとき，彼はすぐさまフランスの国籍略号を認識した。（・・・・・・）

Wolfgang Ecke

＜５＞　この物語の場合に，みんなは“物語スライド”の窓に何を書くのでしょう？

＜６＞　この物語の先を語るためには，みんなにはまだどんなヒントや構想が不足していますか？

＜７＞　今度はこの物語の結びを考えて，それを関連づけながら語ってみましょう。

4　緊張，緊張，緊張

戦没兵士の夜

兵士の冒険的な生活に心を引かれた一人の青年ユァン・チェンは，志願するために国の南部から山東省の方へ移ってきていた。旅の途中で，彼はある人里離れた地方に立ち寄った。彼が安宿にたどり着く前に，闇が彼を襲った。その上，刻一刻と激しくなっていく凍てつく北風が吹いていた。ユァン・チェンはその嵐と戦いながら，宿を見つけられそうな集落をうかがった。

その望みをほとんどあきらめかけていたとき，突然，窓から石油ランプのうす暗い光がもれている一軒の安宿が目にとまった。彼は中に入っていった。その安宿の中には，大勢のお客を待っていたかのように，酒とご飯が用意されていた。その青年は食事と宿泊を注文したが，彼の驚いたことには，両方とも断られた。宿の主人である白髪の老夫婦は，すでにお客がチェックインしており，まもなくここに入ってくるだろうから，彼を受け入れることができないと説明した。

嵐の夜へ再び出ていかなければならないという見通しは，全く気乗りのしないものだった。ユァン・チェンは追い返されはしなかったので，宿の主人が彼に同情してくれそうに思われるまで，長いことお願いを繰り返した。少しの間ためらった後，主人は彼を隣のちっぽけな部屋に案内し，そこで彼が一夜を過ごすことを許してくれたが，食事と飲み物はどうあっても与えてくれなかった。

その小部屋は殺風景だった。掛け布団のない竹製のベットにいたるまで。；ユァン・チェンは横になり，自分の外套にくるまり，目を閉じた。彼は疲れ果てていたにもかかわらず，空腹とのどの乾きが彼を眠らせなかった。長い時間，彼は硬い寝床の上で落ち着かない様子で寝返りをうった。ようやく彼は寝入ったが，間もなく，驚いて再び目を覚ました。

真夜中ぐらいのことだった。食堂からグラスの擦れ合う音が聞こえてきた。到着が待たれていたお客たちがいるのだろうとユァン・チェンは考えた。彼をいぶかしがらせたのは，声が聞こえてこなかったことだった。見たところ，客たちは完全に押し黙って食事をとっているようだった。彼は好奇心をそそられてベットから起き上がり，こっそりと戸口まで行き，隙間から覗いてみた。食堂は兵士たちでいっぱいだった。宿の老夫婦は足を引きずりながら歩き回り，兵士たちに給仕をしていた。すべてのことが，一言もコトバを交わすことなく，沈黙のうちに運ばれていた。

ユァン・チェンの鼓動は速くなった。彼の両親は，彼をしぶしぶ旅に出させた。彼を商人のもとへ修行に行かせようと考えていたのだ。彼の耳には，両親の懇願と非難が，今なお響いていた。彼は思った。この人里離れた地方で大勢の兵士たちに出くわしたことは運命の定めなのだ。自分の決心が正しいことを，神が私に告げてくれたのだと。彼は出行って，将校の一人に相談をもちかけようと考えた。その時，安宿のドアがパット開き，司令官の服を着た，背丈のある，髭の長い男が入ってきた。兵士たちは彼に席をつくり，彼は部屋の中央へと歩き，そこに立ちつくした。

突然，ユァン・チェンは，食堂が不思議な光で満たされているにもかかわらず，石油ランプはもはや燃えていないことに気がついた。；その光はどこから来ているのか，彼は説明をつけることができなかった。

司令官も他の兵士たちと同様に無言であった。ユァン・チェンは奇妙に思い，漠然とした

恐怖が彼を襲い，彼は見守っている場所から離れなかった。
次の瞬間，彼の息は止まってしまった。司令官の合図で，兵士たちは剣を抜き，みずから我が身を傷つけ始めたのだ。腕を切り落とす者もいれば，足を切り落とす者もいた。また，脳天をぶち割る者もいれば，全身にばっくりと口をあける傷を加える者もいた。けれども，血は一滴たりとも流れていなかった。全ての兵士たちが傷ついたとき，司令官は深くうめき声を上げ，両手で頭を抱え，それを苦もなく胴体から引き離し，前方のテーブルの上に置いたのだ。
驚愕する前に彼は意識を失った。彼が目を覚ました時，彼はイバラのやぶの中に横たわっていた。夜が白み始めていた。嵐は去っていたが，相変わらず氷のように冷えていた。ユァン・チェンは辺りを見回し，自分が荒れ果てた原野に取り囲まれていることに気づいた。彼はなんとか起き上がり，引きずるようにして動き，やっとのことで，彼が夜に通って来たにちがいない道まで帰り着いた。
まったくその近くに一軒の安宿があった。彼はドアをノックし，愛想良く受け入れられた。すぐに，元気づけのために一杯の熱燗が用意された。それを飲み干すと，彼は夜の体験を報告することができるようになった。
彼は奇妙な安宿について訊ねてみたが，主人は首を振り，こう答えた。「この地方には宿は二つとありませんよ。あなたの説明によると，あなたは古戦場に迷い込んだに違いありません。そこにはかつて一軒の宿があったはずです。聞くところによると，その宿は戦の時に壊されたそうですが」と。
ユァン・チェンは故郷に帰り，商人のもとへ修行に出た。

Kilthe Recheis

【１】　みなさんは，この物語をどう思いますか？

【２】　みなさんはこの物語の場合に，“物語スライド”の窓の中に何を記入しなければならないでしょう？

【３】　どのような仕方で語り手がその物語をハラハラドキドキさせているか，テクストの形で報告・説明してみましょう。その際，以下のヒントがみなさんを助けてくれます。

語り手は自分の物語を様々な仕方でハラハラドキドキさせるものにします。：

－語り手はいくつかのものを密かにほのめかすだけで，読者に何が欠けているのかすぐにはわからないように，物語を“露出”する。

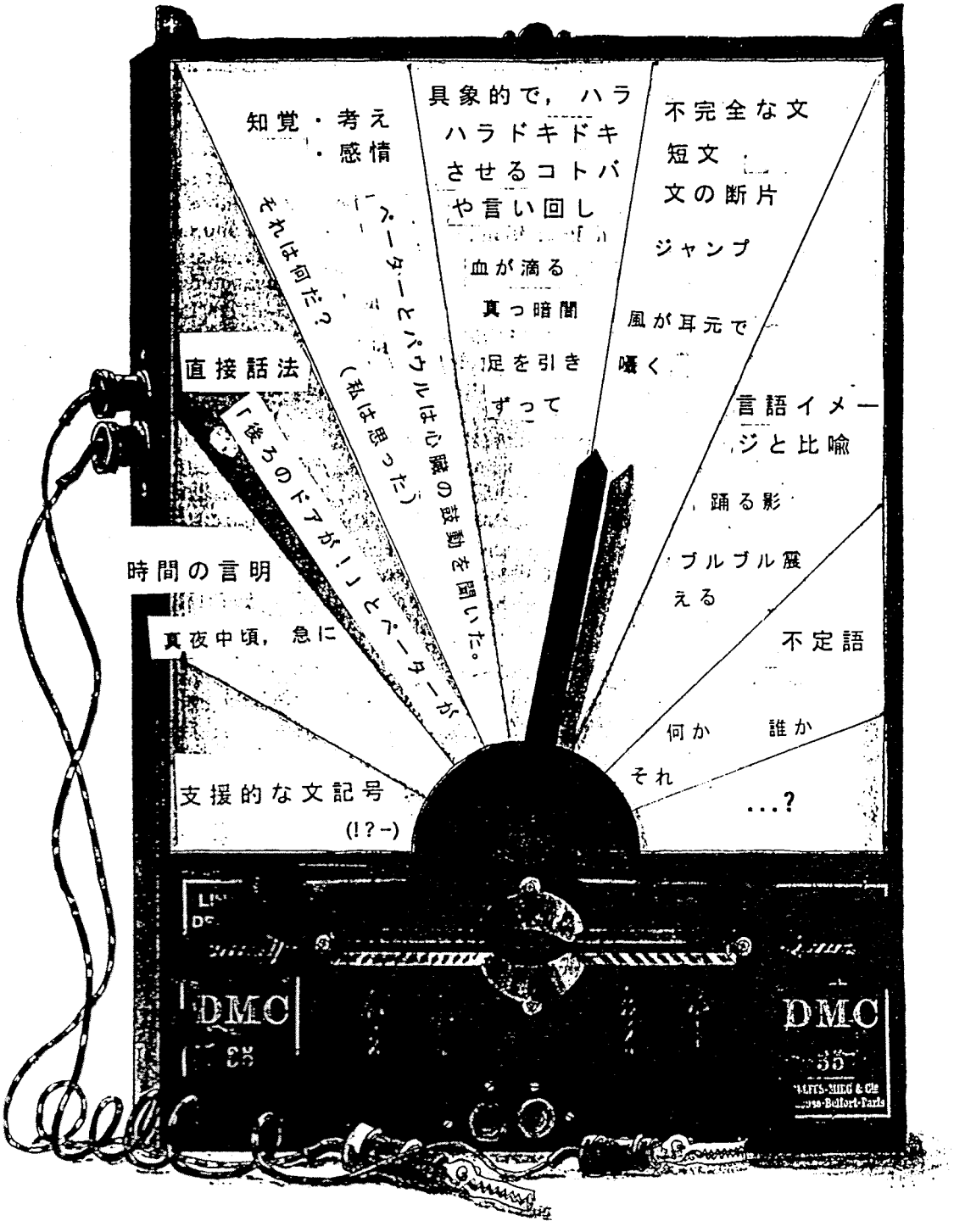
－語り手はしばしば“主人公”に“模索”させ，できごとに対する推測を立てさせ，その連関を（わざと）間違えて解釈させる。

－語り手は意外な結末をもってくる。

－語り手は物語を遅滞さえ，それによって緊張（緊迫）を徐々に作り上げる。

－結末部になって初めて全てを解明する。

また，細かい点においても，語り手は巧みに選ばれたコトバや言い回しによって，読者にとって自分の物語をより一層ハラハラドキドキさせるものにすることができる。



【4】 次のハラハラドキドキさせる物語の部分を，“緊張検査器”で調べてみましょう。そして，言語手段の作用を説明してみましょう。

【5】 “緊張検査器”の指標項目で何か補足したいものがあるかどうか，よく考えてみましょう。

そして今，新たな恐怖が私を襲った。一心臓の鼓動が隣の部屋から聞こえてきたのだ！ その年老いた男の最後の時が来たのだ！ 私は耳をつんざくように鋭い音とともに，ランタンを完全に引き開け，部屋の中へ飛び込んで行った。彼は金切り声を上げた。

彼は用心深くドアから遠ざかり，階段の手すりごしに下を見下ろした。下には濃い影があった。彼には何かが動いたように感じられた。得体の知れぬ人物が階段のところに座って，残忍な目をしてこちらを見上げているのではないか？ それは，下の暗い部屋で，階段の踊り場で，ささやいたり，足を引きずっているのではないか？

けれども私の眠りは，それほど深いものではなかった。というのも，私は真夜中に，驚いて飛び上がり，すぐに目を覚ましたからだ。部屋の中は完全に暗くはなかった。月の光の広い帯がぼんやり白く床にさしていた。ドアは細目にちょっと開いていて，私がそちらを眺めているうちに，一本の羽が跳ね上がった。